

国際協力特別賞

ボランティアの心

富山国際大学附属高等学校 3年
藤井 千聖

私は去年の八月から約十ヶ月間、アメリカ留学をしていた。街の中をホストファミリーとドライブしたことを覚えている。道路の中央や駐車場の端に目をやると、「お金を恵んで」と書いたボードを持つホームレスらしき人々が佇んでいた。このような場面に出くわしたら、まず彼らを疑いなさい、とホストマザーが私に忠告した。彼らの中には、ホームレスのふりをしている人も居るからだ。

貧困層の人々に対し、社会は社会保障やボランティアといった形で彼らを支えている。しかし、アメリカでの光景を目にし、その社会の形に疑問を抱くようになった。社会には貧困層だと偽ってその立場を利用する人が存在する。だから、私はホストマザーが言ったように、支援をする前に彼らのことを疑わなくてはならない。しかし、彼らに本当にホームレスかどうかを聞くことは無駄である。どちらにしろ彼らは首を縦に振るのだ。結果、私は疑いの目を彼らに向け、何もせずに通り過ぎる。そうするうちに、私の頭に一つの考えが浮かんだ。彼らへのボランティアは無意味なのではないか、と。

本来不必要な人が支援を受け、本当に必要な人への支援が薄くなるのが起こりうるのなら、一般市民が行うボランティアは悪行を助長する。本当に困っている人は一般市民に助けを求めず、政府の社会補償をあてにする筈である。政府の方ができることも多く、その規模も大きい。私が彼らにできることは何もなく、逆に何もしないことが彼らのためであると信じるようになった。

私は毎週日曜日に現地の教会に行っていた。ある日曜日、私は協会の活動の一環として、公園でホットドックをホームレスの方に配るというボランティアを行った。当日、私は教会の仲間と沢山のホットドックを作り配った。ふと、ホットドックを待つ人々の列を見てみると、ホームレスの方々の他に、ランニングをしていた人、親子、学生など明らかにホームレスではない方も中に居た。私はなぜ本来私達のボランティアを必要としていない人々が列に並んでいたのか不思議に思い、片付けの最中に教会の大人の方に質問した。

「ボランティアは確かに、食べ物やお金が足りていない人に渡すことだね。でも、僕らはただ物を彼らに渡すためにボランティアをしているわけじゃないんだ。ホームレスや他に社会の中で困っている人と僕らは同じじゃなきゃいけないんだ。僕らが彼らと手を取って、同じ足並みで歩いていることを示さなきゃいけないんだ。そうしないと、彼らはずっと辛い状況から抜け出せないだろう？だから、ホームレスの人達だけにホットドックを渡すっていうのは少し間違っているかな。僕らも、ホームレスの人も、散歩している人も、みんな一緒にホットドックを食べるんだ。それが、彼らの心の救いになるんだ。」

彼の言葉に私は気付かされた。ボランティアは物資の提供だけではなく、思いやりの共有。本当に彼らがホームレスかどうかなど、ボランティアでは重要ではない。ホームレスの人や自分を偽っている人、そして私など、社会の一員である人はみんな悩みと辛さを抱えている。その深刻さには

差があれど、誰しもがその苦悩から脱却したい。しかし独りではその脱却は困難である。そんな時、私達はお互いに、ボランティアという形を通して、貴方は独りではない、と精神を助け合うことが大切なのだ。それがボランティアの意義であり、必要である理由だ。

私は、ホットドックを渡した時に受け取った「Thank you」という言葉をたまに思い出す。その度に、これが社会のために私ができることだという実感が沸く。これからも、他人に手を差し出すだけでなく、共に歩み出すようなボランティアを続けたい。